

氏名（本籍）	高島圭史（東京都）
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	博美第152号
学位授与年月日	平成18年3月24日
学位論文等題目	〈作品〉源氏物語絵巻 第三十六帖柏木二 現状模写 〈論文〉キメラと日本画の美意識 源氏物語絵巻の模写を通して
論文等審査委員	
（主査）	東京芸術大学 教授（美術学部） 手塚雄二
（論文第1副査）	〃 〃（大学美術館） 竹内順一
（作品第1副査）	〃 助教授（美術学部） 吉村誠司
（副査）	〃 教授（ 〃 ） 関出
（ 〃 ）	〃 〃（ 〃 ） 梅原幸雄

（論文内容の要旨）

この研究では、徳川美術館蔵「国宝 源氏物語絵巻〈柏木二〉」の現状模写制作を通して、「国宝 源氏物語絵巻」を含む、平安時代の絵画の有り様を考察した。

平安時代と現代の絵画観はどう違うのか、その疑問を解く手がかりを『源氏物語』が示してくれた。それは物語中で述べられる、絵画における「かたち」と「にほひ」である。

それらは言い換えれば「形態」と「実感」となる。目に見えない「にほひ」を目に見える「かたち」で表現することが平安時代の美術の理想であった。「かたち」に込められた「にほひ」のための細やかな配慮を敏感に読み解くことが、平安時代の絵画鑑賞であった。

絵画の成立の現場において、貴族と絵師が単に鑑賞者と制作者の関係だけにとどまらず、互いに支え合い、影響し合っていることが『源氏物語』や『作庭記』、『古今和歌集・仮名序』から読み解かれる。その響き合いは、平安時代に宮廷で生活していた人々に強く共有された共通感覚を基礎とするものであった。

それら異なる身分の人々が持てる技術・感覚・美意識の融合によって生み出されたものとして「源氏物語絵巻」をみると、その特徴はキメラに例えることができる。

キメラは、ギリシア神話の中で獅子、山羊、蛇が一つになった怪獣であり、生物工学的には、一つの生命体の中に複数の遺伝子が存在するものとして定義されている。複合的生命体として、また怪獣として異様な存在感を放つキメラに、「源氏物語絵巻」をあてはめてみるとその特殊性は「かたち」と「にほひ」、その発生は「写し」で説明がつく。

「写し」とは、原本の優れた要素を自由に編集する、模倣を超えたところにある制作態度である。和歌の手法における本歌取りや、「物合」の遊戯の感覚は、「名歌」や「名画」、「名作」を自由に引用し、自身の制作の動機づけや裏付けとするものであった。

そのような制作において、「かたち」と「にほひ」が「写し」とられ、その時代の新しい感覚が「ずれ」となって加えられていった。その渦中で「キメラ」が生まれ、またその「キメラ」も「写し」とられていくのである。そこに、時代を超えて連綿と続く日本画という絵画の在り方が見えた。

制作された風土、時代の違いは、感覚、美意識に変化をつける。そのため、新時代の感覚で制作された「写し」は、原本と「ずれ」ている。この「ずれ」はすなわち同時代性であり、新しい価値とするこ

とができるだろう。このような「写し」とそれに伴う「ずれ」が、平安時代のやまと絵と現代の日本画とを結ぶ制作の本質であった。

まず、「写し」とられる作品は「名画」や「名歌」といった万人に認められた作品であった。憧れや愛着を含んだ眼差しで鑑賞される「名画」「名歌」の裏側には、人々の記憶が蓄積された共通感覚があって、その共通感覚への接近が「写し」という行為であった。その時代の感覚と、「名画」「名歌」の制作された時代の感覚との「ずれ」が新しい表現を生み出す母胎となった。

「写し」の本質は、「名画」「名歌」へのオマージュであった。そしてそのオマージュの制作には二つの手法が存在した。和歌の手法である「本歌取り」と「物合」^{ものあわせ}の感覚による手法である。それぞれに、「名画」「名歌」に表れた主題やモチーフに共感しながら、新しく制作される作品における生かし方が違っている。

「本歌取り」的手法は、「名画」「名歌」に蓄積された記憶を下敷きに、主題（「にほひ」）やモチーフを変えることなく制作し新しく制作者自身の記憶を付与するものである。そして「物合」の感覚による「合わせ」的手法は、「名画」「名歌」の主題（「にほひ」）を踏襲しながら、「かたち」を対照的に変化させていくものである。

そのどちらにも原点回帰とも言えるような、より深く「名画」「名歌」の時代の共通感覚に接近することが重要であった。その接近は「名画」「名歌」の核である「にほひ」を、現代において再び実感しようとするものである。

模写という行為を「写し」という観点から捉えると、そのような古典作品への姿勢が現在においても可能であることがわかった。それらの表現に込められた平安時代の美意識を「国宝 源氏物語絵巻」の内に見ることによって、絵画の可能性をかんじることができた。

「かたち」と「にほひ」に見える平安時代における絵画の在り方と、「写し」と「ずれ」に見る絵画制作の有り様は、私自身の制作を裏打ちとなり、絵画制作の構造を改めて発見させるものであった。